

# 「黒漆葡萄栗鼠沈金食籠」保存修復報告

幸喜淳\*<sup>1</sup> 室瀬和美\*<sup>2</sup> 室瀬祐\*<sup>3</sup>

## I. はじめに

一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵「黒漆葡萄栗鼠沈金食籠」の保存修復処置は、平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日まで、目白漆芸文化財研究所内の修復施設において行われた。以下は修復内容を記録したものである。

なお、監督職員を幸喜淳とし、修復責任者を室瀬和美、修復担当者を室瀬祐とした。

## II. 名称

黒漆葡萄栗鼠沈金食籠 1 合

## III. 概要

外面を総体黒漆塗り、内面を朱漆塗りとし、外側全面に葡萄、蓋の甲面に 2 匹の栗鼠が沈金で表された円形の食籠である。

本来は 2 段の食籠であったと考えられるが、上段部分が欠失しており、下段に蓋が乗った状態である。

## IV. 現状

全体に打損が多数見られ、そのほとんどは過去の修復により荒い下地が付けられていた。またそれらの修復部分は本来の塗膜面より大きく凹んでおり段差が顕著であった。

蓋、身それぞれの口縁部は形状の原形が定かでない程に損傷が激しく、木地の露出も多く見られた。また蓋の肩部分には木地が大きく露出している部分があり、木地構造が巻胎である様子が確認できた。

蓋の内面には、打損によって見込みに一カ所、側面に複数箇所の亀裂が確認された。同様に身の内面には、見込みに一カ所、側面に一カ所亀裂が確認された。

## V. 修復方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修復に則り、現状保存修復を原則として行うこととする。修復に際しては、十分に事前調査を行い、傷みの現状を確認した上で修復工程を決定する。

また、写真撮影を伴った修復の記録を取り、修復後と比較できるようにし、修復終了後に報告書を作成し提出する。

---

\*1 一般財団法人沖縄美ら島財団 首里城公園管理部 事業課 調査展示係長

\*2 目白漆芸文化財研究所 代表取締役

\*3 目白漆芸文化財研究所 修復技術者

## VI. 修復作業

### <修復前撮影・記録・作業計画>

修復前に、修復後との比較ができるよう、写真撮影を行った。また作品の木地、下地、塗膜、装飾の現状を調査・記録し、修復の作業工程の検討を行い、以下の通り進める事とした。

本作品は打損が多数見られたため、作業に入る前に養生を行う。全体のクリーニングの後、付着物の除去を行う。また荒く付けられた後補の下地は除去することとする。打損により露出した木地部分や虫損、亀裂部分には麦漆を含浸させて補強した後、刻苧で充填を行い、さらに下地で肌を整え、周辺の塗膜と違和感のないよう黒色の下地面で仕上げとする。

尚、蓋の肩部分で木地が大きく露出している部分は、内部の木地構造を後世に伝える貴重な情報資料と考えられるため、刻苧や下地による充填は行わず、これ以上塗膜の損傷を進行させないための際錆の処理に留めることとする。

### <養生>

はじめに修復作業を安全かつ効率的に行うため、打損及び亀裂部分の養生を行った。養生紙には雁皮紙を用い、養生紙の接着には作品に負担のかからないよう接着力の弱いフノリを使用した。



図1 養生Ⅰ

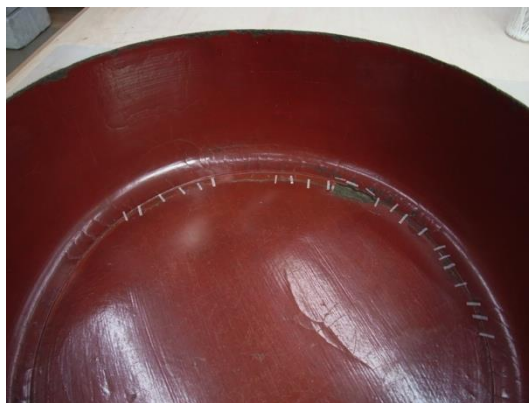


図2 養生Ⅱ

### <クリーニング>

毛棒で全体の埃を払った後、僅かに水分を含ませた柔らかい綿布及び綿棒を使用してクリーニングを行った。



図3 クリーニングⅠ



図4 クリーニング後Ⅰ



図5 クリーニングⅡ



図6 クリーニング後Ⅱ

#### <後補下地の除去>

多くの打損部分には、過去に下地が荒く付けられており、周辺の漆塗膜の上にその下地が付着している部分も見られたため、これらの下地の除去を行った。除去は柔らかい簞や小さな刃物を用い、塗膜を傷つけないよう細心の注意を払って行った。脚の広面積に渡る打損部分では、後補下地の下に後補の木材や合成接着剤が見られ、破損当初、木材の一部が欠失していた事が確認された。



図7 後補下地除去Ⅰ



図8 後補下地除去後Ⅰ



図9 後補下地除去前



図10 後補下地除去後



### <漆固め>

打損部の塗膜接着や刻苧充填を行う前に、塗膜の強化と、漆を使った修復の際に生じる漆染みの防止を目的として漆固めを行った。朱漆部分は色調を損ねないように、素ぐろめ漆と生正味漆を混合したものを希釈して用いた。塗布後、塗膜を傷つけないよう注意しながら漆が表面に残らないよう拭き取った。

また後補下地を除去した部分や、下地の露出部分は、補強を目的として生正味漆を用いた漆固めを行った。



図 11 漆固め・朱漆部分 I



図 12 漆固め・朱漆部分 II



図 13 漆固め・木地部分 I



図 14 漆固め・木地部分 II

### <麦漆含浸>

亀裂や虫損部分には、木地及び下地の強化と、損傷の進行を防ぐため麦漆の含浸を行った。麦漆は溶剤で希釈して複数回含浸させ、徐々に溶剤の割合を少なくしていった。含浸後、麦漆が滲み出してくる場合は、塗膜上に残存しないよう拭き取った。



図 15 麦漆含浸・虫損部分 I



図 16 麦漆含浸・虫損部分 II



図 17 麦漆含浸・亀裂部分Ⅰ



図 18 麦漆含浸・亀裂部分Ⅱ

#### <塗膜圧着>

打損や亀裂により塗膜の剥離が見られた箇所は、麦漆を含浸した後に圧着を行った。蓋鬘部分は小さなクランプを用い、見込み部分は心張りを用いて圧着を行った。



図 19 蓋鬘部分・圧着Ⅰ



図 20 蓋鬘部分・圧着Ⅱ

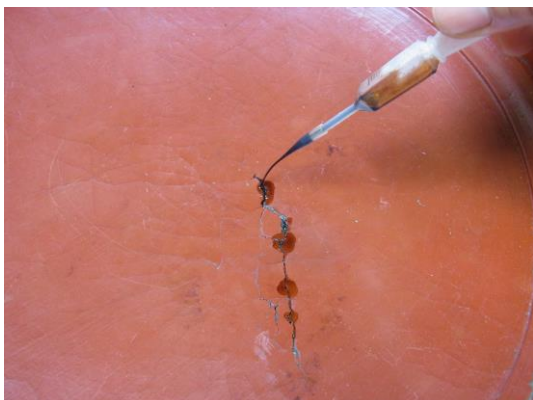


図 21 蓋見込み部分・圧着Ⅰ



図 22 蓋見込み部分・圧着Ⅱ



### <刻苧充填>

塗膜の圧着後、亀裂、打損、虫損部分に刻苧の充填を行った。刻苧は麦漆に木粉及び麻の繊維を混ぜ、徐々に混合させる木粉粒子を細かくしながら、複数回に分けて行った。



図 23 脚裏部分・刻苧充填



図 24 虫損部分・刻苧充填

### <下地付け>

刻苧充填後、刻苧の表面を整えるため下地付けを行った。下地には経年による退色を考慮して、砥粉と僅かな真菰粉を混和した錆漆を用いた。下地が硬化した後、水研ぎを行って下地面を平滑に整えた。



図 25 脚裏部分・下地付け



図 26 身見込み・下地付け

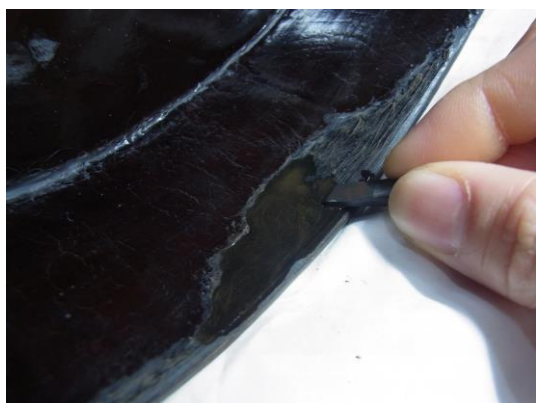


図 27 脚裏部分・下地研ぎⅠ



図 28 脚裏部分・下地研ぎⅡ

#### <際錆>

塗膜の圧着部分や亀裂部分などは、今後触指による更なる塗膜の剥離剥落を招く恐れがあるため、際錆と称する仕上げの下地作業を行った。際錆には麦漆に微細な地の粉を混合して用いた。



図 29 蓋打損部分・際錆Ⅰ



図 30 蓋打損部分・際錆Ⅱ

#### <漆固め>

下地を平滑に整えた後、漆固めを数回重ねる事で、周辺の塗膜と違和感のなくなるよう艶を合わせるとともに、下地の強化を行った。

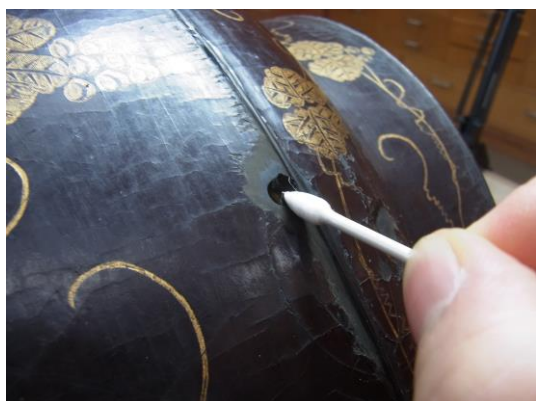


図 31 虫損部分・漆固めⅠ



図 32 虫損部分・漆固めⅡ

#### <修復後撮影・報告書作成>

修復後の撮影を行い、修復記録をまとめ、報告書を作成した。

### VII. 修復工程

- |                |       |         |         |       |     |      |
|----------------|-------|---------|---------|-------|-----|------|
| ①修復前撮影・記録・作業計画 | ②養生   | ③クリーニング | ④後補下地除去 | ⑤漆固め  |     |      |
| ⑥麦漆含浸          | ⑦塗膜圧着 | ⑧刻苧充填   | ⑨下地付け   | ⑩下地研ぎ | ⑪際錆 | ⑫漆固め |
| ⑬修復後撮影・報告書作成   |       |         |         |       |     |      |